

神戸から始まった市民復興まちづくり支援

神戸復興塾塾長／兵庫県住宅審議会会長

小森 星児



1. 3度目撃した大災害

これまで、筆者は3度の災害に遭遇した。研究者としてまちづくりに携わる者としては、運不運は別として稀有の経験であろう。

(1) 戦災

最初は戦災である。もちろん小学生であったので見聞は限られていたが、終戦の前日、疎開先の岩国市で、B29百機による絨毯爆撃を受けた。第2次大戦中でも面積当たり最高密度の爆撃であったという。市街地爆撃は焼夷弾が普通だが、岩国では250キロ爆弾が投下された。このため市街地は深さ5メートルから10メートルに及ぶ穴だらけで、原型をとどめる建物は一つとしてなかった。蜂の巣状に爆弾跡が残る空中写真は市史に掲載されているが、目撃したその惨状はいまだに忘れられない。

(2) 阪神・淡路大震災

2度目は阪神・淡路大震災である。東灘区にあった自宅マンションは全壊し、7階から見渡した森南町の街並みは一見すると無事に見えたが、通りに出ると頑丈な屋根に押しつぶされて1階部分がほとんど倒壊していた。さらに当時の勤務先であった姫路に避難する途中、長田の大火で足留めされ車中で一夜を過ごしたが、翌朝、逃げるように通り過ぎた広大な火災跡にはまだ小さな炎があちこちに残っていた。

(3) 東日本大震災

最後は東日本大震災である。今回は被災したわけではないが、映像による現場中継で自ら体験する以上のショックを受けた。また、津波に洗われた被災地を訪ねると、既視感がよみがえる。筆者は広島原爆の閃光ときのこ雲を目撃した最後の世代で、何度も繰り返された被災地の悲劇がオーバーラップして映るのはやむを得ない。

2. 支援者と受援者の20年

どんな災害でも受援者の境遇はそれほど変わらない。家族や財産を失い、寒さや心細さに苦しむ姿は阪神・淡路大震災でも東日本大震災でも共通して見られた。

阪神・淡路大震災で変わったのは支援者側であろう。まず主体が多様化した。民間で初めに駆け付けたのはボランティアであるが、やがてより組織されたNPOが登場した。さらに、NPOを支援する中間支援組織もこの時期の新しい産物である。

支援の内容も時間の経過とともに変化した。初期は避難所での救護や罹災した住宅の後片付けが主であったが、日が経つにつれ仮設住宅での支援活動や、高齢者・障害者など特定のニーズをもつ被災者への支援が増える。また、遠方に避難した被災者への支援も阪神・淡路大震災以後に本格化した問題である。

筆者自身も、この両方の立場を経験した。初めは全壊マンションの再建組合理事長と兵庫県住宅審議会副会長として、次は被災者を支援する神戸復興塾長、NPO(特)神戸まちづくり研究所理事長¹⁾と、市民活動を支援するひょうごボランタリープラザ初代所長としてである²⁾。

実は避難所や仮設住宅でも、支援者と受援者の二役を兼ねる人びとは少なくなく、円滑な運営の鍵を担っていた。興味深いことに、こうした人材は必ずしもこれまで地域で旗振り役を務めてきたわけではない。災害時におけるリーダーの輩出率には社会関係資本の在り方が深く関係しているように思われるが、その実証分析は今後の災害救援を何かのヒントが得られるのではなかろうか

3. 復興計画の見落とし

別なところでも引用したが、「住んでいたまちに戻りたい声が強いのが神戸の特異性だ。東京では考えられない」と当時の下河辺淳阪神・淡路震災復興委員会委員長が評したことが、筆者に強い印象が残っている。20 年にわたる神戸復興塾の活動は、この特異性の発掘と強化にあったといっても差支えなかるう。

震災 20 周年を特集した神戸新聞の記事で、兵庫県、神戸市双方の復興計画審議会委員長を務めた新野幸次郎元神戸大学学長と、政府の東日本大震災復興構想会議議長を務めた五百旗頭真ひょうご震災記念 21 世紀研究機構理事長のインタビューを読んだ³⁾。

新野元学長は、阪神・淡路大震災は近代都市を直下型地震が襲う世界初の経験であり、単なる復旧ではない大胆な発想が必要であったと総括している。その具体的な例として、自身が会長を務めた「ひょうご創生研究会」の提案のなかから阪神高速道路の地下化、エンタプライズゾーンの指定、阪神大学都市の設立など未完に終わった計画を挙げた。

五百旗頭理事長は、国に復興構想を提案した阪神・淡路震災復興委員会について、被災自治体の尊厳はある程度尊重されたと評価している。その論拠として下河辺委員長が「兵庫と神戸ほど未来構想を持っている自治体は少ない。それを復興に置き換えて実現すればいい」と語ったと紹介している。しかし、それに続けて故貝原俊民前兵庫県知事は「下河辺さんも元官僚。本当の新しい発想は持ち合わせていなかった」と述懐していたという。

それはさておき、ひょうご創生研究会の提案は、筆者が調査したことがあるロンドンのドックランド再開発とパリのシテ・ユニベルシテの計画に学んだもので、高速道路の廃止はニューヨークとボストンが先駆例である。その点では独創的とは言えないが、会議の場所の確保さえ難しいあの 2 か月で構想をまとめたのは今となっては懐かしい。

しかし、驚いたのは関係省庁の反応である。エンタプライズゾーンも大学都市も、いや高速道路の廃止も

聞いたことがないという冷たいものであった。今になって思い返すと、先方は知らないで通すほうが好都合であったのかもしれないが、その当時は口惜しい思いを隠せなかった。

4. 神戸復興塾の実践

阪神・淡路大震災直後、「未曾有の災害によって神戸は 10 年前の水準まで落ち込んだ、この遅れを取り戻すには官民挙げての支援が必要なのだ」という見方が世間に広がった。右肩上がりの経済に慣れた人々にとっては疑いなく頷ける考え方だった。

しかし、神戸復興塾の考えでは大震災によって神戸は 10 年遅れたのではなく、突然 10 年先の世界に投げ出され、否応なしに高齢化、産業の空洞化、膨大な福祉負担などの課題に直面することになった。つまり、10 年前に戻ったのではなく、近い将来、全国各地で解決を迫られる問題を先取りせざるをえないからこそ、政府、民間、学界あげて取り組む必要があると主張したのである。そこで、多彩さと自由闊達な発想をもって、全国各地へ実態や教訓を伝承してきた。前例やマニュアルが役立つ世界では、先見性と発信力が有効だ。こうした地道だけでも欠かせない活動が機動的にできるのが NPO の強みである。

復興まちづくりというと、住宅や防潮堤への関心が高い。しかし、個人や企業、あるいは公共団体が所有していた資産の損失やその回復は復興計画に盛り込まれているが、コミュニティが持っていた計量不可能な共有資産、たとえば風土・景観・伝承などアイデンティティを構成していた要素は取り戻しが困難である。江戸下町を愛したサイデンステッカーは、連綿と受け継がれた江戸の生活文化は関東大震災の打撃から回復できず、明治維新に始まった山の手による下町の圧殺が完結したと指摘している⁴⁾。

まちをつくるのは道路でも建物でもなく、そこで生活する住民である。長い歳月をかけて醸成されたコミュニティの精巧な社会関係は、簡単に移植したり複製できるものではない。地元の人びとと話し合い、地域

固有の生活文化を新しいコミュニティに再生することがまちづくりを支援する専門家の役割であると復興塾は実践を通して学んできた。

5. 「絆」は最後のセーフティネットである

社会保障論の分野で基本的な語彙として用いられてきた『自助、互助、共助、公助』。

災害直後、被災者救援は「自助7割、互助2割、公助1割」といわれているが、いつの間にか互助が共助にすり替わり、行政の自主防災計画では「自助、共助、公助」の3助論に体系化されている。3助論の系譜は、上杉鷹山の「自助、互助、扶助」に遡る。

現代でも、地方では消防・自治組織など、共同生活の様々な局面で近隣社会の無償(利他的)の相互支援である『地縁』が機能しており、また、地縁の薄い都市でも、会社で香典やお祝いなど伝統的な相互扶助の仕組みが残り、趣味や専門を通じた『知縁』というつながりもある。

歴史的には「互助」とは友情、隣人愛、愛校心、郷土愛など見返りを求めない無償の行為であるとともに相互監視の役割を果たしてきた。一方、「共助」は各種の保険制度の根幹にある大数の原則に従う考え方で、災害や事故、病気など生活設計を脅かす予測しがたい要素について、そのリスクと費用の合理的な計算に基づいて運用されている。自助や互助に比べ、費用や効率の点で圧倒的に優位にある。

このため「共助」の制度が整備されるにつれ、これまで「自助」や「互助」が果たしてきた役割は相対的に縮小し、それに伴い、血縁や地縁に基づく家族制度や地域コミュニティの弱体化が始まった。被災地でも外部の応援に頼りすぎ、家族・隣人の助け・責任感の薄まりが懸念されている。

いま「絆」が注目されるのは分かるが、束縛するというのが原義である。絆は最後のセーフティネットに徹すべきであろう。

補注

- 1)阪神・淡路大震災に専門性を生かしつつボランティア実践した大学の研究者、医師、建築家、ジャーナリストなどが自発的に結集し、復興のあり方や具体的な支援策を語り合い、始めた活動。このようにして生まれた団体は被災地のあちこちで活動しているが、特定の地域や既存の研究組織にとられないわれわれの活動は構成メンバーの多彩さと自由闊達な発想が特色な任意団体。
特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所は神戸復興塾を母体としてできた団体・
神戸復興塾ホームページ：
<http://www.kobe-machiken.org/juku/juku01.html>
神戸まちづくり研究所ホームページ：
<http://www.kobe-machiken.org/index.html>
- 2)2002年開設 約100億円の基金をもとに兵庫県が設置。
ひょうごボランティアプラザホームページ：
<http://www.hyogo-vplaza.jp/>
- 3)2015年1月4日神戸新聞
- 4)エドワード・サイデンステッカー 1986『東京 下町 山の手 1867～1923』 ティビーエス・ブリタニカ